

新たな吃音臨床への招待

「第1回 親、教師、言語聴覚士のための吃音講習会」 (2012年8月4・5日千葉県教育会館)
坂本英樹 (どもる子どもの親、教員、NPO法人大阪スタタリングプロジェクト)

吃音講習会は、北は青森から南は沖縄まで、事務局スタッフの予想を超える 101 名、ことばの教室の担当者 58 名、言語聴覚士 20 名、保護者 6 名、当事者 10 名、その他 7 名の申し込みがあった。

盛りだくさんの講習会の報告は、私が講習会から受け取ったものの再構築だが、それが参加者各人の感じたこと、考えたことと共振し、新たな「語り」を生み出すための一助となれば幸いである。

なぜ、親、教師、言語聴覚士なのか

言語関係図の提唱者、W・ジョンソンは「吃音問題には、それを構成するメンバーがいる」と、当事者の話し手、その言葉を聞く他者のもつ意識、本人の考え方も重要だと指摘した。今回、「親、教師、言語聴覚士のための」と題したのは、子どもの問題を構成するメンバーと、どもる子どもと向き合うとはどういうことかを一緒に考えたいとの思いからだ。また、この講習会の前身、2001 年の「第1回 臨床家のための吃音講習会」からの 10 年間で「吃音を生きることを大切にしたいアプローチが少しずつ広がる一方で、依然として吃音の改善が本人や保護者のニーズだと提案され、むしろ近年こうした流れが強まっている」との危機意識、問題意識を私たちが共有していたからでもある。

本講習会を貫くキーワードはナラティブ・アプローチである。ナラティブ (Narrative = 語り、物語) とは近年、人文・社会科学から医療、福祉の領域で注目されている。この考え方を導入することで、大阪吃音教室やことばの教室の実践をひとつの相の下に眺めることも可能となるだろう。

この報告全体を通してこの考え方を明示したい。

基調提案「ナラティブ・アプローチ的吃音臨床の提案」 日本吃音臨床研究会 伊藤伸二さん

21 歳で民間の吃音矯正所・東京正生学院で言語訓練をした伊藤さんは、吃音が治らなかったが、人生の転機となる経験をした。ひとりで吃音に悩んでいた頃の伊藤さんの言葉は受け取り手のないモノローグ (独白) であったのだが、同じような

悩み、体験をもつ人たちとの出会いの中で、ひとつの語りが次の語りを促しそれがさらに新たな語りを生み出していくというある意味祝祭的な場の中で、一緒に笑い泣き、共感してくれる他者の存在を発見した。自らの言葉が孤独なモノローグから他者とのダイアログ (対話) へと変化することで悩みから解放されていくことを経験した。

自分を語ること、他者の語りを聞くこと、その共振の中で新たな自己語りが、自分を語る物語が更新されていくというナラティブ・アプローチの基本的な考え方を、ナラティブという概念がこの世に提唱される以前に伊藤さんは、東京正生学院の日々の中で掴んだのだ。この経験が伊藤さんにどもりを治すことを諦めさせ、どもる人のセルフヘルプグループを設立させる力となり、NPO 法人大阪スタタリングプロジェクトの大阪吃音教室の実践に至る、その後の伊藤さんの必然の半生をもたらしたと言えるだろう。

「語り」は今年で 23 回目を迎えた吃音親子サマーキャンプの性格を一言で表現する言葉でもある。参加する子どもの多くは話し合いを楽しみにしている。二泊三日の中で 90 分の話し合いが 2 回と 90 分の作文教室がある。作文も文字を記すという表出行為、原稿用紙という形で見つめなおすことができるという意味で外在化を伴う自己内対話と考えれば、語りに位置づけることができるだろう。特に初参加の子どもの多くにとっては自分以外のどもる子どもと出会うのも話すのも初めてという驚きの体験の中での話し合いである。

伊藤さんが紹介したのは宮城県女川町の阿部莉菜さんのエピソード。キャンプ初参加の小学校 6 年当時、彼女は同級生からの激しいからかいから不登校になったのだが、話し合いを通して彼女の表情は変化したという。この変化を促したのは彼女の話に最上の聞き方で向き合った仲間存在である。「つらいね、うん、わかる」というような共感的な聞き方だったら、彼女のつらさはその瞬間は解消されたかも知れないが、逆につらいという感情が強化されてしまっただろう。しかし、彼女の話聞く仲間は口々にいろいろな角度からの質問や自分の意見、対処の仕方を重ねて、阿部さんの語りを豊かにしていく。彼らの聞き方は阿部さ

んの中に眠る、まだ言語化されていない経験や考えを開いていった。その過程で阿部さんはどもりをからかわれてつらいという自分に染み付いた物語、それは自分を縛っているドミナント・ストーリーの外に出るきっかけを掴むことができたのだろう。吃音の悩みやそれへの対処の仕方もある、からかいやいじめへのアプローチの仕方もある。そういえばどもりながらでもやり通した発表があったというような記憶も甦ったに違いない。ドミナント・ストーリーでは捉えきれない豊かな経験をナラティブ・アプローチではユニークな結果というが、彼女はその経験を語り合う中で発見し、新たな自己語りを紡ぎ出し、オルタナティブ・ストーリーを語っていくきっかけを得た。彼女がキャンプを通して「もう、どもりを治したいとは思わない」という地平に立て、阿部さんは2学期から登校を始めた。

キャンプでの話し合いや劇の練習を通して子どもたちは吃音の日常、苦労をサバイバルする選択肢を得ていく。どもりから逃げるのではなくサバイバルすること、そのための生の技法を学ぶためのキャンプ、べてるの家流にいうなら「苦労をとり戻す」ためのキャンプなのである。伊藤さんはどもり子どもは弱い存在ではない、子どもには自分自身を支える力があると言う。阿部さんのエピソードがそれを証明している。

その後、阿部さんは2回キャンプに参加し、昨春高校進学を迎えるはずだったが、3月11日の東日本大震災による津波で新しい制服に袖を通すことなく、お母さんと一緒に帰らぬ人となった。

私の知る限り伊藤さんは昨年と今年のキャンプの始まりとこの基調提案で阿部さんの話を紹介している。死者を悼むとはそのひとり一人の固有の生と死の物語を語っていくことだ。津波にさらわれた人たちはその固有の死を生き残った人たちに伝えることができなかつた、また生き残ったものもそれを知るすべがないために語るができなかつた。だとしたら、せめてその生を語ることを死を悼むことなのだと思う。

伊藤さんが話した中から、もうひとり伊藤由貴さんのエピソードを紹介したい。小学校4年から高校までキャンプに参加した彼女の吃音は目立たないものだったが、大学2年から一転してよくどもるようになった。しかし彼女は接客のアルバイトをし、キャンプにもスタッフとして参加した。激しくどもる姿はかつての彼女を知るものにとっては驚きだったが、彼女自身はその事態を落ち着いて受け止めていたという。それは彼女が長いキ

ャンプ歴の中でシャワーのようにいろいろな語りを聞き、バラエティに富んだ職に就いているどもるスタッフと接してきた中で吃音を自分の人生にどう意味づけるのかの自己概念が形成され、どもりとともに生きる覚悟ができていたから、「吃音は変化する」という事実を楽観をもって受け止めることができていたからである。私たちはこれこそ、吃音肯定の臨床のエビデンス（根拠）だと考える。

吃音が薬を2、3錠飲めば治るようなものだったら吃音を否定し、治す、改善するという発想もありえるだろうが、楽石社から100年、言語訓練、コントロール以上のものはないといっている。しかし、たとえどれほどコントロールできたとしても明日もコントロールできるという保障はない。コントロールすればするほど、「次は大丈夫か？どもったらどうしよう」という予期不安は亢進していく。コントロールすることで悩みは大きくなる可能性もあるのだ。「この世の中にもどっていけない場面などどこにもない」と伊藤さんは喝破する。吃音をもっている人の誰もが悩んでいるわけではない。どもりながら豊かに人生を生きる人はいっぱいいる。吃音を言い訳や理由にして人生の課題から「逃げる」ことこそが悩みを深くする、それは治そうとすることの副作用なのである。

ナラティブ・アプローチの観点からいうと、吃音と吃音からくる影響は別問題として考察する必要がある。吃音臨床の本質は言語関係図のZ軸、吃音氷山の海面下の部分へのアプローチなのだ。大阪吃音教室の取り組みの比重もここにある。しかしそれは私たちが言葉や声の問題に無関心であることを意味しない。竹内敏晴さんから学んだ日本語の発声の基本や声を出す楽しさは伝えたいと考えるが、それは言語訓練とはおよそ別のものだ。

吃音を治すことを諦めたところから伊藤さんの人生は新しい展開を迎えた。諦めるとは明らかに見るということだ。では、専門家といわれる言語聴覚士や教員は100年以上の吃音臨床の何を明らかにしているのだろうか。そして、どもり子どもに何を伝えるべきなのか。選択権、決定権は子どもにあると伊藤さんは言う。情報を独占することは相手を支配することにつながる。問われているのは専門家としての姿勢であり、倫理なのである。

講演 「ありのままを生きるというかたち一治すという発想を超えて一」

奈良女子大学名誉教授 浜田寿美男さん

発達心理学が専門である浜田さんは講演冒頭、先輩である岡本夏木さんの「なにか迷った時には少数派につきなさい」という言葉を私たちへのエールとして送ってくれた。多数派は流れに乗るだけで済むから思考停止に陥り、ドミナント・ストーリーにはまり込んでしまう。一方、少数派は常に自らの根拠を考え続ける必要があるのも、物事を明らかに見ることができるとの意味であろう。

浜田さんの考える場は、障害をもつといわれる子ども、とりわけ自閉症などの発達障害をもつ子どもたちとの関わりのなかにある。そのなかで形成された浜田さんの「発達観」は動物学者の日高敏隆氏の言い方を援用すると「すべての人間たちの生き方は、赤ちゃんも幼児も、子どももおとなも、なんらかの障害をもつものももたないものも、すべて等価であり、一つのパターンの論理のなかでは、そこに発達のものさしをもちこんで、その上下、遅速を論じることはできるかもしれないが、異なるパターンの論理（生きるかたち）に優劣はつけられない」（2007「障害と子どもたちの生きるかたち」岩波現代文庫）というものである。右肩上がりの発達観が主流のなかでは伊藤さんと同様、浜田さんも少数派といえるだろう。

長らく勤めた福祉系の学科をもつ花園大学での学生との出会い、交流も浜田さんにとっての考える場であった。30年以上も前のこと、脳性まひの学生が入学してきたが、構音がはっきりしないことから友人の輪の中に入れずにいた。しかしある時、意を決して友人の輪に飛び込んだところ、1、2ヶ月もするとお互いの会話に何の問題もなくなった。学生が言語訓練をしたわけではない。はっきりしない発音のまま、友だちに何とか伝えようと手持ちの力をやり繰りし、友だちもまた聞き取ろうと努力するなかで、お互いの力が発揮された。友だちとの学生生活という場があって伝える力が育まれた。彼らの「人どうしの関係の網の目」が形成されたのである。力は生活のなかで使ってはじめて根を下ろす。しかし、学校的文脈では「力を身につけて将来に備えましょう」の言説が支配的である。浜田さんはそれを「錯覚」と表現する。私たちの社会を覆う大きなドミナント・ストーリーのことである。

現在、大阪・高槻市在住の50歳を超えた、自閉症の症例の関西第1号と言われた人のエピソードも興味深い。彼が自閉症と判断された当時は小児科医も文献のうえでしか知らない時代だった。彼は地元の普通学校に通い、母親であるUさんは「高槻自閉症児親の会」のリーダーを長く務めた。地

域と関わって生きてきた人たちだ。

そのUさんがある時、浜田さんとの会話で「自閉症は治ってもらったら困る」と語った。自閉症が風邪のように薬を飲んで治るのなら、治ってもらってもいいが、どれだけ多くの親が次々と出てくる新薬開発という曖昧な情報や最新の理論や脳科学に基づいた療法に淡い期待を寄せ、その度に引きずり回されてきたことだろう。Uさんは自閉症は治るという次元のものではないと十分にわかったというのだ。しかし、これ以上の理由が治ったら困るという考え方の背景にはある。

治るとの思いで子どもをあちこち引き回し、いろいろな療法、訓練に励むことは、いまのこの子のありのままを否定する、この子を差別することに等しいのではないかとUさんは語る。「生き方」というような自分で選べる観念的なものではない、その断念、諦めの中から家族や他者との、他者や環境との双方向的な関係の中から、かろうじてそうではありえないものとしての「生きるかたち」が織り成され、私たちはそれを選んでいく。この子のありのままを、変えようのない与えられた条件を引き受けて生きるとはそういうことである。

自傷、他害行為のあった彼に噛まれた同級生の女の子は、あわてるUさんに「この子が噛むのは言葉みたいなもんだから」と言ったという。その小学校の同級生は彼とともに生きる場の中から、このようなスキルを身につけたのだろう。浜田さんは「発達障害バブル」という表現で、現在の特別支援教育のあり方に危機感を表明している。支援という名の排除や囲い込みが進めば、このような豊かなスキルを、互いに身につける機会を私たちは奪われることになってしまうだろう。

浜田さんが語ることは伊藤さんが吃音について語る論理と同じものだ。親、教員、言語聴覚士がただ治したいという思いで接する時、それは子どものありのままを否定していることになる。「私は私のままでいい」という自己肯定、つまり吃音肯定から吃音とのつきあいが始まる。

対談「治す文化に対抗する力」浜田VS伊藤 司会 国立特別支援教育総合研究所牧野泰美さん

司会の牧野さんは特総研では言語障害教育の研究のかたわら教員研修を担当し、各地のことばの教室の教員との出会いを多くもつ人だ。冒頭、牧野さんはどもりが体質のようなものだと考えれば、改善ではなくどう引き受けるかの課題ではないか。

しかし、親や教員や言語聴覚士はどもりに対して無力な自分であることが認められない、何かできる自分でありたいとの思いをもち、それが「治す」ということへ駆り立てているのではないかと指摘し、専門性や専門家のあり方が問われていると対談のフレームを提供した。

浜田さんは私たちの人生に準備の時間ではなく、次のステップをにらみながらいまを生きているのではないこと、手段を整えてから話すのではなく、その時の手持ちの力でしか話すことはできない、スキルではなく何を伝えようとするかが問題なのだとの主張を対談でも強調した。それはどもりながらも日常を丁寧に送る中で、いつか自然と「吃音は変化する」、しかし、その結果を目標にしてはならないという伊藤さんの考えと通じる。訓練室・治療室では確かに吃音のコントロールは可能だろう。しかし一歩外に出た日常の世界ではそれは何の効果もない。サバイバルする中で、生きる場の中でしか言葉は育まれない。だから、日常に出て行くことを促すことがことばの教室の教員や言語聴覚士の仕事なのではないか。

伊藤さんは吃音を生活習慣病に例える。吃音を言い訳に日々の、ひいては人生の課題から逃げたりすれば、その症状は悪化するという。浜田さんも逃げたり、隠したりすることの弊害を指摘し、幼い頃、事故から右手の4本の指を失った女性の話を紹介した。不憫、かわいそうと思った母親は彼女を守るつもりで、世間の目に触れないようにと手編みの手袋をずっと与えたのだが、それはその手のありようを隠すべきもの、否定すべきものとして母親が裁いていた、差別していたことに他ならない。そして彼女自身もそのドミナント・ストーリー、価値観を内面化していった。学生時代、そのありように疑問を持ち、手袋を外した彼女は顔から火が出るような羞恥を感じ、世間の目を意識したのだが、それは彼女自身の目であったのだ。この物語から彼女が出ることができたのは、卒業後勤めた通所授産施設で手に関して、遠慮なく質問されたり、触れられたりといういろいろな反応を受け、さらに母となって子どもの手を引いたり、引かれたりという中で、ありのままの自分として生きた日々を過ごしたことによる。

伊藤さんは吃音をコントロールすることを教えられるということは、吃音に対しての否定的なメッセージになるという。隠し続けることがどれだけ生きづらいことか。専門家は当事者の苦しみに無知であることを自覚すべきだと浜田さんも言う。言語聴覚士や教員はドミナント・ストーリーの代

表者としてではなく、いまここにいる子どもを支える専門家として存在して欲しい。そのためにもナラティブ・アプローチでいう、「無知の姿勢」に立ち続け、子どもの声を丁寧に聞き、子どもの疑問にも正直に丁寧に答えて欲しい。たとえば、治したいというニーズをもつ子どもに対して、展望のない訓練や専門家自身は決してしない方法を示すのではなく、「私は治せない」となら言えるのではないか。そのうえで「楽に声を出す」ことなら一緒に取り組むことがあると提案できるはずだ。専門家として情報を提示したうえで子どもと向きあうこの対等の姿勢からは、きっと子どもとの間に対話が生まれることだろう。

伊藤さんは吃音を意識させない方がよいというドミナント・ストーリーに対して、吃音の早期自覚教育を提唱する。真実を先送りには専門家としての倫理にもとる。子どもとの最初の出会いを大切にしたい。誠実に向き合えば子どもの何かは変わることを信じて私たちは活動してきた。浜田さんも親や専門家が先回りして、子どもを現実から遠ざけること、皮膜の中で育てることを批判している。初めての出会いとは思えないほど二人の語りが共振した時間だった。

グループでの話し合い

対談後の夕食休憩の時間は、TBS テレビ報道局(当時)の斉藤道雄さんが伊藤さんたちやキャンプを取材した「報道の魂」(2005)を視聴した。

初日最後のプログラムは参加者を6つのグループに分けての話し合いである。初日の講習を受けての率直な感想や疑問や子どもとの関わりの具体内容について出してもらった。話し合われたそれぞれの内容はこの紙面では割愛するが、このグループでの話し合いがあったからこそ、伊藤さんたちの投げかけたものが参加者の中で大きな渦となって、2日目昼からの実践講座に流れ込んでいくことになろうとは、誰も想像できなかった。

2日目 シンポジウム(ミステリー・ツアー)

前日のグループの話し合いの報告と、質問の時間。初日の伊藤さんの話を初めて聞いて、自分がそれまで依拠していた訓練や考え方との根本的な相違に混乱する、言語聴覚士からの戸惑いの声が紹介されたが、伊藤さんは吃音をコントロールするための言語訓練と吃音を認めることの両立は可能かの質問に、議論を繰り返した結果、両立はし

ないこと、世界のどもる人のほとんどはどもりながら手持ちの力で生きているという否定できない事実の中で、どもることに不本意なまま生きるのと、どもる覚悟を決め納得しながら生きるのとでは全然違うのではないかとコメントした。

シンポジウムのメンバーはことばの教室の教員として奥村寿英さん、渡邊美穂さん、高木浩明さん、溝上茂樹さん、現在は通級指導教室担当の佐藤雅次さん、言語聴覚士として野原信さん、どもる子どもの親として私、坂本英樹、当事者としてNPO 法人大阪スタタリングプロジェクト会長の東野晃之さんである。この企画は当初、それぞれが実践発表してから論議する予定だった。それを急遽変更し、シンポジスト個々の実践、提案の詳しい内容は事前資料に譲り、それを前提に吃音の臨床にとっての「語りの実践（ナラティブ・プラクティス）」のもつ意味を伊藤さんを道案内役として語り合う、どこへたどり着くか分からない、ミステリー・ツアー、大喜利となった。

ナラティブ・アプローチはまず、問題と人を分け、問題そのものを外在化、目に見える形にして考察するところから始まる。東野さんは吃音に悩んでいた頃はその問題をどう整理したらいいのか、自分の中の否定的な思いをどう語ればいいのかかわからず、セルフヘルプグループに参加しても当初は話ができなかったと述懐し、問題を明らかにする、取り出すためには自分を分析する、語るための小道具が必要なのではないかと示唆した。

ことばの教室の教員もその小道具を自らの実践の入り口に置いている。奥村さんは子どもに吃音について知っていること、わからないことを紙に書いてもらう学習活動を始め、高木さんの実践は積み木で言語関係図をつくることや吃音氷山を描くことを通じて、子どもが形、大きさ、重さを感じることができるだけでなく、それらが変化することまでの洞察を含んだものだ。渡邊さんは「どもりカルタ」が子どもが心身を働かせながらの自分の気持ちの確認になること、さらには自分自身のどもりカルタをつくることで表現する力、伝える力を身につけることができるとして、カルタを友だちに見せて自分のことを語る子どもの姿を紹介。人と人をつ結びつけるどもりカルタの可能性を提示した。溝上さんの絵を書いている子どもといる語るといふ話は、要項表紙のどもりキャラクター「もっちい」の絵に私たちの目を釘付けにした。どれも外在化の好例だ。

ここで、会場の大阪スタタリングプロジェクトの川崎益彦さんから当事者からまだ語られていな

い物語を聞くという「聞く」は、AA などのアノニマス（匿名性）のセルフヘルプグループの原則である「言いつ放し、聞きつ放し」の「聞く」とどう異なるのかとの質問が寄せられた。語りは語りと出会い、対話となることを要請する。教員、言語聴覚士も自己を語らなければ子どもとの対話は成立しない。伊藤さんはナラティブ・アプローチでは相手に対する「好奇心に支えられた対等な語り合い」から、新たな物語が紡ぎだされるという意味で、「共著者」という考え方を紹介した。傾聴という受容的な聞き方との相違は明らかだろう。

野原さんからは言語聴覚士として結果を性急に求めてしまう自分がいるとの話があったが、語りが熟成されるのを待つのも、ひとつのスキルである。聞き方を学ぶ、質問の仕方を修養することが語りを豊穡にするための要件なのである。これからその課題に取り組もうとして、伊藤さんは「ナラティブ元年」を宣言する。

当事者の発言がこのシンポジウムを構成した。当事者こそがその問題の専門家なのである。

実践講座「親の公開相談会を通して、親との関わりについて考える」

3名の保護者と伊藤・高木・渡邊さん

昼休憩の時間は、第 11 回（2000 年）の吃音親子サマーキャンプの記録を上映した。竹内敏晴さんが子どもたちにレッスンをしている映像は貴重なものだ。映像の中のかつての自分と対面した何人かの人に当時の思いを振り返ってもらった。

公開相談会は、親として子どもとの関わりをどう考えるのか。教員、言語聴覚士にとっては保護者の思いをじっくり聞く経験になること、また保護者と対話をする伊藤さんの姿を話し方、聞き方のひとつの事例として参考になればとの思いからの企画である。前日のグループの話し合いで、「やはり子どもの吃音を治したい」との思いを持ち続けるお母さん、初めて参加したお母さん、吃音親子サマーキャンプ経験のあるお母さんの 3 人に、当日公開相談会にしてもいいかと提案し、それを受けて下さった 3 人にまず感謝したい。

自己紹介を兼ねての子どもの話から始まった。小学 1 年の男の子をもつ A さんはそのうちに治るだろうと思っていたのだが、学校医に「吃音はほっておいてはいけない」と促され、療育センターの言語聴覚士を訪ね、そこですべての生活場面で「わーたーしーはー」とゆっくり話すという統合

的アプローチを指導された。しかし、毎日の生活の中でその話し方が維持できるはずもなく、治らないのはそのせいかもしれないとも考えてしまうという。この講習会では初めて聞く話ばかりで驚きと戸惑いの連続だったが、肩肘張って治そう、治そうと思わなくてもよいのかと少し楽になった。しかし、夫の吃音が小学4年の時に治ったので、その父親の子どもだから、治ることへの期待を捨てきれないと揺れ動いている気持ちを率直に話してくれた。

Aさんは子どもにゆっくりと話しかけ、嫌がらなければ訓練もしたいとの考えがあることに、伊藤さんは子どもとのゆったりとした時間をもつことは大切だが、親の治るかもという期待は子どもを傷つけることになる、吃音に対する親の否定的な思いがちょっとした表情となり、子どもに罪悪感をもたせ、親の前で話すことを避けるようにさせてしまうのではないかと応じ、高木さんは幼い子どもでさえ親の思いは敏感に感じ取るものだと述べた。当事者で教員でもある佐々木和子さんなどもるのがつらいのではなく、治るという思いで見つめられること、治らないのはかわいそう、劣っていると思われることがつらかったという。治るはず、かわいそうというまなざしで傷つくのだと体験を語った。

また、Aさんは「治らない」と言うことに子どもが傷つかないか心配だと話した時、たとえ傷ついたとしても、そこから手持ちの力で立ち直るのは成長のプロセスとして必要なことだろう。担うべき課題は子ども自身が担わなければならないのだろうと、まさに、ナラティブ・アプローチ的な対話が展開していった。

Bさんが語ってくれたのは吃音をサバイバルする話である。Bさんの家族は小学5年の男の子の吃音に関わるエピソードを笑い飛ばす日常を送っているという。ナラティブ・アプローチではユーモアのセンスを大事にする。ユーモアはその状況を違った角度から見ることで生まれる高度なサバイバル・スキルであり、ドミナント・ストーリーの外に出ることを可能にするものだ。彼はスポーツに親しむ少年として成長しているが、母親としてはこれからの受験、就職、結婚までのことを思うと心配は尽きないから、今回参加したという。

この話を受けて、Cさんがマイクを握った。二人のどもる子ども、中学3年の男子と小学4年の女の子のお母さんであるCさんは吃音親子サマーキャンプにも継続して参加し、吃音を通して子育てを見つめてきた保護者である。Cさんはどもり自体に対する否定的な意識はなかったが、からか

いなどの二次的な問題は気になることとして考えてきた。Bさんと同様、得意なスポーツをもってほしいとの願いから彼に剣道を勧め、習わせたのだが、それは学校以外のつながりが彼の支えになることもあるとの思いからだ。中学に入ると親が提供した選択肢からではなく自分の好奇心、価値観からやりたいことを見つけてきた彼は音楽部に入り、居場所を拓けている。確実に自分をつくっている彼のことを輝きが出てきたと感じている。

小学4年の女の子は兄の場合とは違う課題があるかもしれないが、時が来たら心配し、悩んでいこうと、そう考えられるようになったところに親としての成長を感じるとCさんは語る。

親の成長ということに関して、渡邊さんは自分が人生を楽しむこと、その姿を見せることが子どもが人生を切り開いていく力につながる、何事かを為していく子どもの姿を信じようと親としての思いを語り、伊藤さんは障害や何らかの課題をもつ子どもの親として大切なことは何かと問いに、親自身が自分の人生を楽しむこと、子どものためにといて自分の人生を諦めないことだと答えた。社会の圧力、世間の目というドミナント・ストーリーを内面化し、子どもの犠牲になるとやがては我が子を恨むことになるかも知れない。それは子どもにとっても不幸なことだ。親の人生が拓がれば子どもの世界も拓がっていくのである。

3人の子どもの年齢も、タイプも違う保護者の率直な生の声が対話を繰り返していく中で変化していく様子を聞いた、貴重な時間だった。

ティーチン「2日間をふりかえって」

2日間、私たちは実によく語り、よく笑った。最後は輪になっての全員の感想の交換である。通常、研修会などの感想は、「勉強させていただきました」という形だけのものになるのだが、次々と語られたのは「楽しかった」、「この場にいることが心地よかった」の言葉だった。その中に、これまで誰にも言えなかったことを、今語らなければと決断した勇気ある自己開示があった。参加者全員でつくりあげたこの場を信頼してくれたからだろう。どもりというテーマがいろいろなところで生き難さを抱えている人とも出会えるものだということを教えてもらうことができた。感想の交換が、交感、交歓へと変化していく時間はこの場がナラティブ的な空間であることの証明で、それは得がたい体験だった。